

〔論文〕

前置詞と文法化

—— その一般的特性とコラ語「前置詞」——

松本 曜・高田 優子*

0. 序^①

個々の言語の分析において必要なことの一つに、その言語に於ける品詞の認定がある。品詞とは、語形変化や分布などの文法的な振舞いにおいて、共通の特性を持つ一群の単語に対して与えられるカテゴリーである。代表的なものに名詞、動詞、形容詞などがある。これらの定義は必ずしも容易ではない。また、各言語によって存在する品詞が異なる^②。

この論文は、前置詞と呼ばれる品詞について考察するものである。ここで前置詞と呼ぶのは、英語の *in*, *at* の様に目的語（補語）の名詞句の前に置かれる前置詞（preposition）と、日本語のカラ、マデの様に目的語（補語）の名詞句の後におかれる後置詞（postposition）の両方を含むカテゴリーの事である。この二つを、位置のみを理由に異なった品詞として認める必要はない。それはちょうど、英語の様に目的語の前に来る動詞と、日本語の様に目的語の後に来る動詞を異なった品詞として扱う必要がないのと同じである。この前置詞、後置詞の両方を含む品詞を表わす名前として、adposition という用語があるが、この語の訳語が余り親しまれていないことを考えて、ここでは「前置詞」を両方を含む用語として用いることにする。

本論では、前置詞の統語的、意味的定義を考察した後、前置詞が世界の言語において非常に不安定な品詞であることを指摘する。その様な存在としての前置詞を、近年注目を浴びている「文法化」という視点から論じ、この概念が、前置詞、また品詞一般の扱いにどのような視点を投げ掛けるかを考察する。その例としてインドネシア・マルク地方で話されているコラ語（Kola）の前置詞に

* Summer Institute of Linguistics (TCC 1978年卒業)

ついて考察する。

1. 前置詞とは何か

1.1 文法的定義

前置詞の定義として、文法的な特性からの定義が幾つか試みられている。Bresnan, Chomsky らは、名詞 (N), 動詞 (V), 形容詞 (A), 前置詞 (P) を普遍的品詞として扱い、これらを、動詞的であるか、名詞的であるかという、二つの独立した性質から、次のように定義している⁹⁾。

- (1) N [+N] [-V]
- V [-N] [+V]
- A [+N] [+V]
- P [-N] [-V]

つまり、動詞的であって名詞的でないものが動詞、動詞的でなく名詞的であるのが名詞、動詞的で名詞的でもあるのが形容詞、動詞的でも名詞的でもないのが前置詞である。この定義では、名詞的、動詞的であるとはどういうことなのか(どの様な特性を捕らえるものか)が独立して考察されなければならない。

この名詞的、動詞的である、という特性の内実を捕らえる定義として Jackendoff のものがある¹⁰⁾。Jackendoff は先の四つの品詞を主語を取るか、目的語を取るかという観点から定義する。動詞は主語と目的語の両方を取り得る。名詞は主語は取るが目的語は取らない。形容詞は主語も目的語も取らない、前置詞は目的語 (*in Tokyo* の *Tokyo*) は取るが主語は取らない、という。

- (2) N [+SUBJ] [-OBJ]
- V [+SUBJ] [+OBJ]
- A [-SUBJ] [-OBJ]
- P [-SUBJ] [+OBJ]

名詞と形容詞の扱いがこれでいいのかには疑問が残るが、動詞と前置詞との違いが主語を取るかどうかであるとする点は洞察のある分析となっている。

1.2 意味的定義

品詞を意味から定義しようとする試みも様々な形で行われてきた。品詞の意味的相関性はかつてから言われてきたことである。例えば、名詞とは物体を表

わす単語、動詞とは動作を表わす単語、形容詞とは特性を表わす単語、と言った具合である。この様な意味的定義の限界は、必ずしも品詞のすべてのメンバーにその定義が当て嵌まらないことである。例えば、英語の *kindness* は性質を表わすが名詞であり、日本語の「太っている」は性質を表わすが動詞のテイル形である。この様な現象は、品詞を意味から定義することの不適切性を示すものと考えられてきた⁶⁾。しかし、近年、この様な意味的な定義を見直そうとする動きがある⁶⁾。この新しい考えは、典型（プロトタイプ）という概念を視野に入れたもので、名詞は典型的には物体を、動詞は典型的には動作を表わす、というものである。この考え方は言語習得においても有効である。Pinker によれば、子供は、先ず、典型的な名詞によって、その性質を学ぶ、という。つまり、まずは、物体をさす単語を名詞として扱い、その文法的特性を理解する。そして、そのような文法的特性が、物体以外のものを指す単語にも当て嵌まれば、それも名詞として扱うようになると言う⁷⁾。

では、典型的な前置詞の意味とはなんであろうか。前置詞は一般に関係概念を表わすと言う。例えば、*He is in the building* のいう文では *in* は *is* の主語の *He* と *in* の目的語の *the building* との空間的位置関係（「建物の中にいる」）を表わしている。この他にも前置詞は、時間関係、因果関係などの諸関係を表わすと言える。Pinker は関係概念の中でも、位置関係が前置詞の表わす典型的な概念であると述べている⁸⁾。一般に、空間的位置関係以外の関係概念が空間的位置関係の比喩的拡張であると考えられていることから、これは妥当な考え方であると言える。なお、Croft はそもそも前置詞を普遍的品詞と考えておらず、言語変化の過程に於ける一時的段階にすぎないとしており、定義をしていない⁹⁾。

前置詞のこの意味的定義を先の文法的定義と合わせて考えると、興味深い前置詞の姿が浮かび上がってくる。前置詞が関係概念を表わすとは、二つのものの関係を表すと言うことである。一方、前置詞は文法的には目的語のみを取り、主語を取らない、つまり、一つの項しか取れないのである。つまり、前置詞が表す関係とは、目的語が表している事物と、文法的には無指定のもう一つの事物との関係である、ということになる。例として、次の四つの文を考えてみよう。

- (3) a. I went *to* Tokyo.
- b. I put the cake *on* the table.

c. I broke the glass *with* a stone.

d. I did not go to the party *because of* the rain.

(3a)の文に於いて、*to* は動詞の主語の *I* と前置詞の目的語 *Tokyo* との位置関係を表している。(3b)に於いて *on* は、動詞の目的語 *the cake* と前置詞の目的語 *the table* との位置関係を表している。(3c)に於いて *with* は *I broke the glass* という出来事と前置詞の目的語 *a stone* との関係（使役的動作とその手段）を表している。(3d)においても、複合前置詞 *because of* が *I did not go to the party* と *the rain* の関係を表している。この様に、前置詞が関係を表わす事物には様々な可能性があるのである。

2. 前置詞の存在と文法化現象

2.1 前置詞の存在の不安定性

以上のような特質を持ったものを前置詞と呼ぶとして、この品詞は諸言語に普遍的に見いだせるものであろうか。一つ指摘できることは、異なった言語において、独立してこの様な単語が見いだせることであり、これは、前置詞が言語の文法の一部として潜在的に可能なカテゴリーであることを示している。先に空間的位置関係が前置詞の典型的意味であることを述べた。空間的位置関係は表現される内容として重要な概念である。それゆえ、言語がこの様な関係を表わす特別なカテゴリーを作る可能性があることは容易に理解できる。

その一方で、前置詞を持たない言語が存在するという主張がある。Croft は Maricopao 語がそうだとしている⁽⁴⁰⁾。この言語において前置詞的關係はすべて、前置詞のような独立した単語ではなく、接辞によって表わされると言う。この他にも、前置詞と考えられる単語が一つ、あるいは二つしかない言語もあると述べている。このことは、位置関係が必ずしも前置詞という特別のカテゴリーで表現されなくても良いことを示している。物体（名詞）、行為（動詞）、性質（形容詞）と比較すれば、位置関係とは必ずしも特別扱いはされる必要はないと言うことである。つまり、前置詞とは、潜在的に独立した品詞として存在する可能性を持っているが、全ての言語の中で実現している品詞ではない、という事になる。

前置詞が歴史的には安定したカテゴリーではないことはよく知られたことである。多くの言語において前置詞は他の品詞からの転用によって生じている。

Kahr, Blake, Svorou, Heine らが指摘するように、前置詞は動詞、名詞、副詞を起源とする場合が多い⁽¹¹⁾。また、前置詞が、独立した単語としての性格を失い、名詞の格変化語尾となるケースも頻繁に観察されている。例えば、スラブ語系諸語の格語尾がそのようにして発達したことは確実である⁽¹²⁾。つまり、前置詞は動詞、名詞、副詞が格語尾へと変化する途中の暫定的一段階である、という見方もできる⁽¹³⁾。

2.2 前置詞と文文化

前置詞のこのような性格は、その文法的性質にある。品詞カテゴリーはいわゆる「開いた類」すなわち、名詞、動詞のように、多くの項目があり、付け加えることが容易であるカテゴリーと、冠詞、助動詞のように、限られたメンバーからなり、自由に新たなメンバーを加えることができないカテゴリーとがある。前者は語彙的なカテゴリー、後者は文法的カテゴリーとも呼ばれるが、前置詞は、閉じた類、文法的カテゴリーに属する（但し、冠詞のように完全に閉じた類ではなく、やや開いた類に近い性質も持つ）。一般に文法的なカテゴリーに属する項目は語彙的なカテゴリー（名詞、動詞、形容詞、副詞）から文文化と呼ばれる過程を経て発達することが知られている⁽¹⁴⁾。例えば、多くの言語において助動詞は動詞から、冠詞は数詞や指示代名詞から発達している。前置詞もこの点では例外ではないのである。

前置詞が発達する典型的な例をいくつか見てみよう。まず、多くの言語において、名詞から前置詞が発達する例がある。西アフリカやアメリカン・インディアン⁽¹⁵⁾の幾つかの言語では、身体⁽¹⁶⁾の部位を表す名詞が前置詞に発達している。これはヘブライ語にも見える現象である。多くの場合、これらは、英語で表現すれば、*in front of* の様な構造から、*front* の位置に来る名詞が前置詞化している。「頭」を表す単語が *on*、「背」を表す単語が *behind* の意味の前置詞へ、といったパターンが共通してみられる⁽¹⁵⁾。英語の *beside* など、もともと、*by the side of* のような表現から発達したものである。

また、動詞から発達する例も多く観察される。西アフリカ、東南アジア、オセアニアの言語などでは、多くの前置詞（あるいは前置詞らしき単語）が、serial verb 構文と呼ばれる構文から発達している。serial verb 構文とは、英語の単語で置き換えると、(4)に示したような文で、複数の動詞が接続詞なしに

羅列され、一つの命題を表現する構文のことである。

(4) a. I buy book give him. (= I bought a book for him.)

b. I run go his house. (= I ran to his house.)

先にあげた諸言語では、このような文の *give*, *go* が次第に動詞としての性質を失い、*for*, *to* の様な前置詞に発達したと考えられている。動詞としての性質を失うとは、例えば、時制、アスペクト、一致などの動詞に付く接辞を取れない様になる、ということである⁽⁴⁶⁾。

この文法化のプロセスは漸次的なものであり、歴史変化上の一時点においては、前置詞なのか、名詞、動詞なのかの区別がつきにくい場合が数多く存在する。例えば、西アフリカのエウエ語の *tsó* は ‘come’ の意味の動詞としても、また前置詞としても使われる。空間の起点を表す ‘from’ の意味の前置詞として使われる場合は、特定の時制、アスペクトの接辞しか取れない。また、時間を表す前置詞としても使われたときには、どの様な時制、アスペクトの接辞も取れないと言う⁽⁴⁷⁾。

2.3 日本語の複合後置詞

日本語においてもこの様な例が存在する。「～について」「～によって」「～として」「～に対して」などの複合後置詞がそうである⁽⁴⁸⁾。これらには、もともと、格助詞と動詞のテ形の連続であったものが、複合的に一つの後置詞としての役割を担うようになったものである。つまり、従来は(5a)の様な構文で使われていた「に+動詞のテ形」が、(5b)の様の一つの後置詞として機能するようになった、というのである。

(5) a. 太郎は、その職務に就いて、色々な面で活躍するようになった。

b. 太郎は、その問題について、色々な角度から論じた。

これらの表現には、もとの格助詞+動詞としての性格と、全体としての後置詞的性質とが混在している。動詞と後置詞とは幾つかの点で異なる。例えば、先にみたように、動詞には主語があるが、前置詞には主語がない。この点から、(6)の二文を考えてみよう。(6a)では、動詞の「就く」が、その主語に対する敬意を表現する主語尊敬形の「お就きになる」になっている。この語形によって「先生」への敬意が表現されており、「就く」に主語があることが分かる。ところが、「～について」の「つく」を主語尊敬形にすると(6b)の様になるが、

この文は非文である。つまり、「～について」の「ついて」には主語がなく、この点では動詞としての性格を失っている。

- (6) a. 先生は、その職務におつきになって、色々な面でご活躍するようになられました。
b. *先生は、その問題におつきになって、色々な角度から論じられました。

また、動詞は活用するが、後置詞はしない、という違いがあるが、この点において「～について」などはどうであろうか。「～について」の「ついて」の部分は動詞として否定形や使役形にすることは出来ない。

- (7) a. *先生は、その問題につかないで、何も論じなかった。
b. *彼はその人を、その問題につかせて、話させた。

この点では、「ついて」は動詞としての性格を失っている。ところが、全ての活用形が不可能かと言うとそうではない。例えば、丁寧形のマス形を作ることは出来る。

(8) 先生は、その問題につきましても、色々な角度から論じました。
この様に、「について」の「ついて」には動詞的性格も残されている。

同一の項目でも、その用法によってどれだけ動詞的性格が残されているかが異なる場合もある。例えば、「によって」は手段、原因、受身文での論理的主語などを表わすことができる。この中で、手段、原因、そして、受動文の論理的主語が動作主である場合は、「よって」の部分で否定形にすることができる。ところが、動作主以外の受動文の論理的主語の場合はこれが出来ない。

- (9) a. 不当な手段によらないで当選した人はいない。
b. 地震によらないでも火事は起こる。
c. 神によらないで作られたものはない。
d. *神によらないで愛されたものはいない。

この様に、日本語の複合後置詞の場合、動詞的性格と後置詞的性格が混在している。このような場合、動詞と前置詞との間に明確な線を引くことができない、と言ったほうが事実合っている。つまり、カテゴリーには中間的な存在が認められるというわけである。

3. コラ語の「前置詞」

動詞から前置詞への文法化の例として非常に興味深い例として、インドネシアのマルク地方で使われているコラ語の例がある⁽¹⁹⁾。この言語においては前置詞的な意味は三種類の表現によって表現される。

3.1 分類 I

分類 I のものは serial verb 構文と呼ばれる (10) のような表現で使われる斜線部に示した単語である⁽²⁰⁾。

- (10) a. Ni a-bana a-ka re a-*tuh* na wasiha
 he 3s-go 3s-to jungle 3s-accompany his wife
 ‘He went to the jungle with his wife.’
- b. Ak ku-pu pep k-*uk* beda
 I 1s-kill pig 1s-use bushknife
 ‘I kill a pig with a bushknife.’

この文における *tuh* と *uk* は、前置詞的な働きをしているが、単独で主動詞として使うことができ、また、例文が示すように、主語との一致を示す接辞が付く。これらは文法的には動詞として扱うことができる。

3.2 分類 II

第二のタイプは (11) の例文の中で斜字体で示してあるような、動詞的前置詞であり、これがコラ語において最も多く見いだされる。

- (11) a. Iri da-mina da-*na* kanang palaw.
 they 3p-stay 3-at my house
 ‘They stayed at my house.’
- b. Kama ma-taler ma-*pay* panua akin.
 we 1p-go. out 1p-from village this
 ‘We went out from this village.’
- c. Iri da-yaf da-*ka* Tina
 they 3p-speak 3p-to Tina
 ‘They spoke to Tina.’

d. Iri da-kut da-wa Kres
 they 3p-tell 3p-concerning Kres
 ‘They talked about Kres.’

位置 (locative), 起点 (source), 到着点 (goal), 関連 (relevance) などの基本的な関係概念は、この分類Ⅱの表現を用いて表わされる。これらの例文で興味深いのは、動詞の前置詞に、主語との一致 (agreement) を示す接頭辞 (マーカー) が付いていることである。これらの接頭辞は選択的であり、付いたり、付かなかったりする。これが分類Ⅱが分類Ⅰのものとは異なる点である。

もし、これらの単語が純粹に前置詞であるとすれば、前置詞が主語を取らない単語であると言う先の文法的定義と矛盾する現象である。実際のところ、主語との一致を示す前置詞の存在は知られていない。今まで動詞が前置詞化する例として論じられてきたケースのほとんどは、西アフリカや東南アジアの言語であり、そもそも動詞が主語との一致を示さない言語であった。インドヨーロッパ語族においては分詞が前置詞化する例があるが (*during*, *considering* など)、分詞もそもそも主語との一致を示さない。オセアニアの言語で、主語との一致を示す動詞から前置詞化が起こっているケースがあるが、この場合は、動詞の前置詞化にともない、主語との一致を示すマーカーは常に欠落するようになっている⁽²¹⁾。コラ語の動詞的前置詞は、動詞から前置詞への変化に於けるごく初期の段階にあるものと思われる。

動詞的前置詞が動詞と異なる点は幾つかある。まず、動詞的前置詞のほとんどは、文の主動詞として単独で使うことは出来ない。また、先に指摘したように、主語との一致は選択的である。また、接辞により否定にしたり、副詞で修飾することは出来ない。

では、どの様な時に一致マーカーが付き、どの様な時に付かないのであろうか。一つの例として、*ban* ‘come, from’ を取り上げることにする。この単語は、動詞として単独で使うこともできるし、また「前置詞」として使うこともできる。(この様に ‘come’ の意味の動詞が ‘from’ の意味の前置詞として発達するのはよく見られることである。先ほどのエウエ語の例を参照のこと。) 動詞として使われた例としては次のようなものがある。

- (12) Tamata tare ka da-ban
man some these 3p-come

‘Some of these people came.’

この文においては述語として自動詞 *ban* が使われている。この場合は接辞が付く。

前置詞として使われた場合、一致を表す接頭辞が付く場合と付かない場合とがある。これを次の対話における A と B の発話において考察しよう。

- (13) A : Ka mol ban panua ba?
you 2s-come from village which

‘Which village are you from.’

- B : Ak kol ku-ban Kabufin

I 1s-come 1s-from Kabufin

‘I am from Kabufin.’

A の発話では接頭辞が付いているが、B の発話では付いていない。

ここで考えられることは、「前置詞」の目的語が強調される時、接頭辞が付き易いということである。前置詞に付いた接頭辞がハイライトマーカの役割を果たしていると言える。(13) において「どの村から」との質問に、新情報としての「ガフィンから」の部分が強調されているのは自然なことである。この様に、談話的な考察により接頭辞の有無が説明される場合があるように思われる。

もう一つ、接頭辞が有る例と無い例を考察しよう。

- (14) a. Tamata ne a-so Yesus ban awyaw.

Tamata that 3s-see Jesus from far

‘That man saw Jesus from a distance.’

- b. Tamata kekin da-yamuh da-ban panua kekin
man these 3p-walk 3p-from village these

‘The men walked from these villages.’

(14a) に於いては *ban* の目的語が「遠いところ」であり、限定された範囲ではないのに対して、(14b) に於いては「これらの村々」であり、指示形容詞が付いた名詞句が目的語となっており、範囲が限定されていると言える。

この様に、文や談話 (discourse) のレベルで見たとき、動詞的前置詞の接頭

辞には、目的語を強調したり、限定したりする役割があると言える。

(14a)と(14b)の違いに関するもう一つの要因として、動詞の前置詞が主語の移動を表わしているかどうかの違いがある。つまり、(14a)では文の主語が、*ban* が指し示している移動の移動物ではないのに対して、(14b)では主語が移動物である。つまり、(14b)は文の主語と前置詞の目的語との位置関係を表わしているのに対して、(14a)はそうではない。この点で(14b)に於いて「動詞的前置詞」が動詞の主語と一致するのは理解できる。一方(14a)の例は *ban* が文の主語の束縛を離れて、前置詞として機能していることを示している。

なお、この *ban* を使った前置詞句は、(15)の様に名詞を修飾する為にも使われる。この場合も文の主語の束縛を離れている。

(15) *ben saymayah ban Duwayda*
news good from Lord
'the good news from the Lord.'

3.3 分類Ⅲ

最後に、分類Ⅲは、主語との一致を示さない前置詞である。この類に属する語は多くはないが、例としては、*aka* 'to, for, because of' がある⁽²²⁾。主語との一致を示さないことから、他の「前置詞」よりも前置詞化が進んだ状態にあると言える。

この前置詞は(16a)の様に、動詞の主語の位置関係を表すのにも使える一方、(16b)の様に動詞の目的語の位置を表すのにも使える。

(16) a. *Ak ku-bana aka re*
I ls-go to jungle
'I go to the jungle.'
b. *ku-fukan kaytabi kekin aka ri*
ls-move board those to there
'I moved those boards there.'

また、'because of' の意味では、この前置詞は原因と結果を結び付けるため、文全体と *aka* の目的語を結び付けることになる ((3d)を参照のこと)。この様に、*aka* は動詞の主語の束縛を完全に離れている。

この *aka* は、歴史的には先の *ka* に三人称単数の *a-* が付いたものである可能

性がある。そうだとすれば、*ka* が、動詞の主語以外のものと前置詞の目的語との関係を表すにつれて、主語が何かにかかわらず無標の *a-* が付くようになったという可能性がある。三人称単数が無標と言えるかどうかには独立した根拠を示す必要が有ろう。

3.4 主語と動詞的前置詞

コラ語の前置詞的表現において興味深いのは、動詞の主語と前置詞の目的語との関係である。主語との一致を示す接頭辞が付くことは、文の主語との関係が強いことを示唆している。実際にその様な点から説明される現象も幾つか見えてきた。

特に、分類 I で使われる手段を表す *anal* や *uk* は動詞の中でも他動性の高い動詞であり、動詞の主語が前置詞の目的語を限定、束縛、支配する時に接頭辞が付きやすいとする良い例である。

もう一つ興味深い例として、分類 II の *ban* の次のような例がある。

(17) *Suhat yena a-ma ban Milton.*
letter one 3s-come from Milton.

‘A letter arrived from Milton.’

この例は、文法の上では、主語は手紙を指す無生名詞 *suhat* である。しかし、実際に起こった行為と言う観点からすれば、動作主は、前置詞の目的語である、有生固有名詞で表されているミルトンである。先に、動詞の主語が前置詞の目的語を限定、束縛、支配するとき、一致マーカーが付き易いと述べたが、(17)では形式上の主語である無生の「手紙」が有生の「ミルトン」を支配するのは不自然なのか、一致マーカーが付かない形が使われている。

以上のように、コラ語を研究するものにとっては、動詞なのか、前置詞なのかの品詞分けが難しい場合が多い。しかし、視点を変えて、コラ語を母国語とする人達の立場に立ってみると、彼等の関心事は品詞分けではなく、効果的なコミュニケーションである。どの様な場合にこの語を使うのだろうかと視点を変えて考えた時に、複雑に見える語の使い方に規則性を見いだしたりもするのである。

4. 結語

以上、前置詞という品詞の特性について考察してきた。前置詞は、人間の言語に潜在的に存在する品詞であるが、すべての言語に実現しているわけではない、しかも不安定な存在であることを指摘した。また、前置詞としての認定の難しい例を文法化と言う観点から考察し、コラ語を例に、その微妙なケースを意味的、談話的な考察も含めて議論してきた。

前置詞には、名詞や動詞ほどの注意は払われないことが多い。しかし、日本語を学ぶ外国人にとって最終的には「てにをは」の助詞が難しいという場合が多いことから分かるように、前置詞の理解は、効果的な意志伝達を可能にするためにも役立つのではないと思われる。

本論文で扱った文法化という視点が示唆する重要なこととしては、文法カテゴリーの連続性がある。前置詞なのか動詞なのか区別しにくい例がある、と言うことは、一見言語の分析を繁雑なものとするために、事実として認めることに抵抗がある人もいる。しかし、近年の言語研究はこれが言語の事実であることを明らかにしてきている。また、文法化にはかなりの規則性があることも分かってきている。世界の諸言語において、非常によく似た前置詞、助動詞などの発達パターンが見られるのである⁽²³⁾。(先に見た、コラ語とエウェ語に於ける‘come’から‘from’への変化もその例である。)この様な文法化に関する知見は、未分析の言語を研究するフルドワーカーにとっても有益なものとなろう。

注

- (1) 本論はセクション1と2は、高田の研究を念頭において松本が執筆し、セクション3は高田が執筆したものに松本が一部手を加えたものである。なお、セクション3でその一部を報告しているコラ語の研究は、高田により SIL の研究の一部として行なわれたものである。なお、本論の執筆に当たり、津村俊夫氏より貴重なコメントをいただいた。この場を借りて感謝したい。
- (2) 例えば日本語には二種類の形容詞（いわゆる形容詞と形容動詞）を認める必要がある。また、オーストラリアのワルビリ語には形容詞がないことが知られている。ヘブライ語における形容詞の存在にも議論がある。
- (3) Joan Bresnan, "On the form and functioning of transformations," *Linguistic Inquiry* 7: 3-40 (1976); Noam Chomsky & Howard Lasnik, "Filter and control," *Linguistic Inquiry*

- 8: 425–504 (1977).
- (4) Ray Jackendoff, *X-bar Syntax* (Cambridge: MIT Press, 1977).
- (5) Frank R. Palmer, *Semantics: A New Outline* (Cambridge: Cambridge University Press).
- (6) William Croft, *Syntactic Categories and Grammatical Relations* (Chicago: University of Chicago Press, 1991); Ronald Langacker, “Nouns and verbs,” *Language*, 63: 53–94 (1987); Stephen Pinker, *Language Learnability and Language Development* (Cambridge: Harvard University Press, 1983).
- (7) 前掲書
- (8) 前掲書
- (9) William Croft, *Syntactic Categories and Grammatical Relations* (Chicago: University of Chicago Press, 1991).
- (10) 前掲書
- (11) Barry J. Blake, *Case* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994); Joan Casper Kahr, “Adpositions and locationals: typology and diachronic development,” *Working Papers on Language Universals*, No. 19, 21–54 (1975), Stanford: Stanford University; Soteria Svorou, *The Grammar of Space* (Amsterdam: John Benjamins, 1994); Bernd Heine, Claudi Ulrike and Friederike Hünemeyer, *Grammaticalization: A Conceptual Framework* (Chicago: University of Chicago Press, 1991).
- (12) Bernard Comrie, *Languages of the Soviet Union* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981).
- (13) William Croft, *Syntactic Categories and Grammatical Relations* (Chicago: University of Chicago Press, 1991).
- (14) Christian Lehmann, “Grammaticalization: Synchronic variation and diachronic change,” *Lingua e Stile* 20: 303–18 (1985); Bernd Heine, Claudi Ulrike and Friederike Hünemeyer, *Grammaticalization: A Conceptual Framework* (Chicago: University of Chicago Press, 1991); Elizabeth C. Traugott and Paul J. Hopper, *Grammaticalization* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993).
- (15) 前掲書
- (16) 前掲書 ; Carol Lord, *Historical Change in Serial Verb Constructions* (Amsterdam: John Benjamins, 1993).
- (17) 前掲書
- (18) Yo Matsumoto, “On the grammaticalization of verbs into adpositions: The case of Japanese,” Paper presented at the 11th National Meeting of the English Linguistics Society of Japan, November 27, 1993, Kyoto.
- (19) Yuko Takata, “Word structure and reduplication in Kola,” *NUSA Linguistic Studies of Indonesian and other Languages in Indonesia*, Vol. 34 (Jakarta: NUSA, 1992). マルクの言語に関するものとしては、他に次のものがある。Donald A. Burquest and Wyn D.

- Laidig (eds.), *Phonological Studies in Four Languages of Maluku* (Summer Institute of Linguistics and University of Texas at Arlington Publications in Linguistics 108) (Arlington: Summer Institute of Linguistics, Ambon: Pattimura University, 1992).
- (20) Mark Durie, "Verb serialization and 'verbal-prepositions' in Oceanic languages," *Oceanic Linguistics* 27, 1-23 (1988).
- (21) Yuko Takata, "Word structure and reduplication in Kola," *NUSA Linguistic Studies of Indonesian and other Languages in Indonesia*, Vol. 34 (Jakarta: NUSA, 1992).
- (22) 前掲論文注 7
- (23) Bernd Heine, Claudi Ulrike and Friederike Hünemeyer, *Grammaticalization: A Conceptual Framework* (Chicago: University of Chicago Press, 1991).

松本〔言語学（統語論意味論）専攻〕

高田〔言語学・コラ語聖書翻訳専攻〕